

紅すずめ

小川未明

青空文庫

ある日のこと、こまどりが枝に止まって、いい声で鳴いていました。すると、一羽のすずめが、その音色を慕ってどこから飛んできました。

「いったい、こんなような、いい鳴き声をするのが、俺たちの仲間にあるのだろうか。」と、すずめは不思議に思ったのです。

すずめは、すぐ、こまどりがとまって鳴いているそばの枝の下りてとまりました。そして、鳴いている鳥をつくづく見ると、姿といい、大きさといい、また、その毛色といい、あんまり自分たちとはちがっていませんでした。

すずめは、考えてみると不平でたまりませんでした。なぜ、自

ぶん
分たちにも産まれてから、こんないい鳴き声が出せないのだろう。
おな
同じように翼があり、またくちばしがあり、二本の足があるのに、
どうして、こう鳴き声だけがちがうのだろう。もし、自分たちも、
こない声が出せたなら、きっと、人間にもかわいがられる
にちがいないと思いました。

すずめは、心の中に、こんな不平がありましたけれど、しばらく
だま
黙って、こまどりの熱心に歌っているのに耳を傾けて聞いて
ねっしん
いました。すると、またこのとき、このこまどりの鳴き声に聞き
うた
とれたものか、どこからか一羽のからすが飛んできて、やはりそ
えだ
の木近くの枝に止まりました。

からすが、強く羽音をたてて、飛んできたのを知ると、こまど

りは、さもびつくりしたようですが、やはり知らぬ顔をして歌い
つづけていました。

すずめは、こうして自分たちとあまりようすの違わないこまど
りが、みんなからうらやまれるのを見て、ますます不平でたまり
ませんでした。ついに、すずめは、こまどりに向かってたずねた
のです。

「こまどりさん。どうしてあなたは、そんないい声をもっておい
でなのですか、その理由を私に聞かしてください。私も同じ鳥で
すから、そして、あなたとは格別ちがつていないように思つて
います、だれがあなたに、そんないい音色を出すことを教えた
のですか、私にきかせてください。私も、ぜひ、いつて教わつて

きますから。」といいました。

このとき、こまどりは、はじめて歌うのをやめました。そして、すずめの方を向いて、

「すずめさん、お疑いは無理ありません。しかしこれには子細のあることです。あなたはあの日輪が、深い谷間に沈んでいたときのことをお知りですか。私たちの先祖は、ちようどここにいなさるからすさんのご先祖といつしよに、日輪を谷から、綱で縛つて空へ引き上げるときに、骨をおつたのです。私たちの先祖は、みんなをはげますために、笛を吹いたり、笙を鳴らしたり、また歌をうたつたりしたのでした。それで、孫子の代までも、こんないい鳴き声が出されるようになったのです。あなたたちの先

祖んぞは、そのとき、やはり畑はたけや、野原のほらを飛びまわっていて、べつに
 手助けてだすをしなかつたから、のちのちまでも平凡へいぼんに暮くらしていな
 さるのです。」と、こまどりはいいました。

これを、黙だまって聞きいていたすずめは、頭あたまをかしげて、

「それはほんとうのことですか？ まことに恥はずかしいことです。

もしそうでありましたら、私わたしはこれから日輪にちりんのいられるところ

までいって、おわびをします。そうすれば、きっと日輪にちりんは私わたし

ちの先祖せんぞの怠慢たいまんをお許ゆるしくくださるでしょう。そして、私わたしは、美

しい翼つばさと、また、あなたのようないい鳴き声なきこえとを授さずかってきます

。」と、その正しょうじき直わかな若わかいすずめはいいました。こまどりは、

じつと一ひとと一ひとところを見みつめて考かんがえていました。

「すずめさん、それは容易よういなことでありません。あの日輪にちりんの輝かがやいているところをごらん下さい。あんなに雲くもが早く走はしつてい
はありませんか。いつも大風おおかせが吹ふいているからです。あなたは、
きつと、あの風かぜのために、どこへか飛とばされてしまうにちがいな
い。まず、あの風かぜを切きる工夫くふうをしなければなりません。」と、こ
まどりはいいました。

すずめは、大空おおぞらを仰あおいでみました。

「なるほど、雲くもが走はしつています。あなたのおつしやるように大風おおか
風かぜが吹ふいているようすです。どうしたら、私わたしの小さな体からだが、風かぜ
に吹ふき飛とばされずに、高たかく、高たかく飛とんでゆくことができますでし
ようか。教おしえてはくさいませんか。」

「それほどまでに、あなたがおつしやるなら、教えてあげます。

あなたは、これから三年の間、荒い海の上で風に吹かれながら飛ぶ稽古をなさるのです。そして、それができるようになったら、日輪のいるところを目がけて翔けて上がるのです。」

「すずめは、感心して、美しいこまどりのいうことを聞いていました。」

この話を黙って聞いていたからすは、鳴きながらどこへか飛び去りました。つづいてこまどりが、すずめを見下ろして、

「また、お目にかかります。」と、一言残して、からすとは、反対の方へ飛んでいってしまいました。

ひとり、木の枝に残されたすずめは、このとき決心いたしましたし

た。それからまもなく、すずめも、北^{きた}をさして姿^{すがた}を消^けしてしまつたのです。

あるときは、すずめはつばめにまじつて、岩^{いわ}に砕^{くだ}ける白^{しろ}い波^{なみ}をみお見^み下^おろしながら、海^{うみ}の上^{うえ}を翔^かけりました。また、あるときはしらすぎにまじつて、風^{かぜ}の吹^ふく日^ひに、そして、海^{うみ}の上^{うえ}が暴^あれて、どちら^みを見^みても黒^{くろ}くも^{くも}雲^{うみ}がわきたつような日^ひに、波^{なみ}を切^きつて中^{なか}空^{ぞら}にひるがえることを学^{まな}んだのです。

はる^{はる}、なつ^{なつ}、あき^{あき}、ふゆ^{ふゆ}、春^{はる}、夏^{なつ}、秋^{あき}、冬^{ふゆ}というふう^{ふう}に、三年^{ねん}の間^{あいだ}、あわれなすずめは海^{うみ}の上^{うえ}で、しらすぎや、つばめや、また寒^{さむ}い国^{くに}から渡^{わた}つてきたいろいろ^{いろいろ}な鳥^{とり}などと、交^{まじ}わつて暮^くらしました。その間^{あいだ}には、緑^{みどり}色^{いろ}に空^{そら}が晴^はれて、その下^{した}に大^{おお}きな海^{うみ}が、どさりどさりと物^{もの}憂^うげに波^{なみ}

を岸辺きしべに打ち寄せて眠ねむつているような、穏おだやかな日もあつたので
 す。そのような美しい景色けしきは、とても野原のはらや、林はやしや、田圃たんぼなどを
 飛とんでいた時分じぶんには、すずめに見みることのできなかつたいい景色けしき
 でありました。

また、夏の晩方ばんがたには、日輪にちりんが真まつ赤かに、大おおきな火ひの球たまの転ころ
 がるように海うみの中なかへ音おともなく沈しずんでゆくこともありました。この
 とき、小ちいさなすずめは、その昔むかし、あの日輪にちりんに綱つなをつけて、から
 すや、こまどりや、いろいろの鳥とりらが引ひいて、深ふかい暗くらい谷底たにそこか
 ら、日輪にちりんを引き上あげたことを思おもい出だしました。すると、こまど
 りの唄うたをうたつた、あのいい音色ねいろが耳みみに聞きこえるような、また、
 笛ふえや、太鼓たいこや、笙しょうの音色ねいろなどが、五さい彩さいの美うつくしい夕ゆうぐも雲なの中なかからわ

いて、海の上まで聞こえてくるような、なつかしい感じがしたのであります。

「あの太陽は、また、真つ暗な深い谷底に落ちてゆくようだ。どうして、それをだれも昔のように引き上げずとも、ひとりでに朝になると上るのだろう。それが不思議でならない。」と、すずめは思いました。

そして、いよいよ自分が、日輪を目かけて空の上へ飛んでゆく日がきたとき、自分は、暗くなったら、太陽がああして谷底に沈んでしまつて、夜になつて、星の光が、うす青い奥深い空に輝きはじめたとき、どこに泊まるであらうか。そのことを、こまどりから聞かないうちは、安心して長い長い旅をつづける

ことができない。その間には、風が吹くこともあろう。また雨が降ることもあろう。すずめは、もう一度、ぜひあのこまどりにあつて、そのことを聞こうと思ひました。

ある日のこと、すずめはいつしよに、波の上を飛びまわつて遊んでいた、年老つたしらさぎに別れを告げて、三年前、こまどりとあつた野原をさして飛んできました。

「二、三日も探しまわつたら、あのこまどりにあわれないこともあるまい。」と、すずめは思つたのです。

すずめは、木の枝に止まつては、もしや、あのこまどりの聞き覚えのある歌の音が、どこからか聞こえはしないかと耳を澄ましていました。そしてこちらの林から、またあちらの林へと伝つて

歩いていました。

ちようど、このとき、いつかのからすにすずめは出あいました。

「からすさん、からすさん、いいところでお目にかかりました。

お達者たつしやでなによりけっこうでございます。」と、すずめは呼びかけました。

からすは、頭あたまをかしげて、じつとすずめを見ていましたが、

「ああ、いつかのすずめさんでしたか。たいへんにあなたの姿すがたは変わったので、ちよいとわかりませんでした。翼つばさの色いろがすっかり赤あかくなりましたね。」と、からすはいいました。

すずめは、驚おどろいて、自分じぶんの身みのまわりを見みまわしながら、

「私わたしが、赤あかくなつたとおっしゃるのですか？」と聞き返かえしました。

「あなたには、それがわからないのですか。」と、からすは笑わらいました。

「なるほど、私わたしの姿すがたは変かわりました。」

「あまり空そらを飛とんで、日ひに焼やけたんですよ。」と、からすはいいました。

「すずめは、急きゆうに悲かなしそうな声こえを出だして、

「私わたしは、早はやく、太たい陽ようのおそばへゆきたいと思おもうんです。そして、なにかお役やくにたつことをして、りっぱな鳥とりとなつてきたいと思おもうのです。それで、いつかのこまどりを探さがしているのです。」と、答こたえました。

すると、からすはまた、からからと笑わらいました。

「おまえさんは、あのこまどりのいったことをほんとうにしていたのですか。もしそうだったらお気の毒なことです。あのとき、こまどりがいいかげんなことをいったのは、私をおそれて、私にへつらつて、あんなでたらめのことをいったのです。私は、平常あのこまどりがおしやべりなもんですから、ひとついじめてやろうと思っていたのでした。なんで、私の先祖なんか、日輪を綱でひいたのですか。ほんとうにこまどりは、うそをいうことの名人です。あなたは、いままで、それを信じていたのですか。」と、からすはあきれたような顔つきをしていいました。

すずめは、二度びつくりしました。そして、長い三年の間の自分の苦勞がむだであったことを、深く嘆き悲しみました。

「からすさん、私は、三年の間、空の上へ飛んでゆく稽古をしました。そして、いまは、雨にも風にもひるまぬ修業を積みました。しかし、それももう、なんの役にもたたなくなりましたのでしようか。」と、すずめはいまにも泣き出しそうにいいました。「どんな鳥でも、太陽の輝いているところまで上り得る鳥はありません。しかし、すずめさん、あなたは、その姿となつてしまつては、ふたたびあなたの故郷へは帰れませんよ。だれもあなたを自分の仲間だと思つうものはありますまいから。」と、からすはさも氣の毒そうにいいました。

紅すずめは、だまつて、しばらく思案に暮れていましたが、やがて、南の故郷へは帰らずに、北をさして飛び去つてしまいま

した。すずめはしらさぎや、いわつばめのいるところへ、あお青い、
あお青い海うみのある方ほうへ帰かえっていったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「早稲田文学」

1921（大正10）年8月

※表題は底本では、「紅《べに》《すすめ》」となっています。

※初出時の表題は「紅雀」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紅すずめ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>